



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	バザーロフ論
Author(s)	金子, 幸彦; Kaneko, Yukihiro
Citation	スラヴ研究, 2, 13-30
Issue Date	1958
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4930
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112997.pdf



On Bazarov

Y. Kaneko

Between the type of man of the hero of Tourgenév's "Fathers and sons," and that of the heroes of Chernyshevsky's "What to do?"—especially Rakhmetov, there is much that differs in basic points. The difference is noticeable particularly in the political program each had for the reform of Russian society. The ways of thought of Bazarov found a supporter in Pisarev, who, drawing upon them, developed his theory of realism. The community of thought between Bazarov and Pisarev, the difference between Bazarov and Rakhmetov, the disputes between "Russkoe Slovo" and "Sovremennik" indicate that in the sixties of XIX century there were two different types of radical intellectuals who worked for the reform of Russian society. We can, therefore, recognize Bazarov not as a transitional type of man that developed into the Rakhmetov type, but as a type distinct in itself, a type that reflected the thought and character of a part of radical intellectual society that worked in a different direction from Rakhmetov and Chernyshevsky, and thus we can recognize the reason and necessity for his existence in the sixties of XIX century.

バザロフ論

金子幸彦

トゥルゲーネフの作品のなかで、《父と子》(1862)ほど、ながい、はげしい論争をまきおこした作品はほかにない。このロマンにたいする急進的陣営の評価は二つに分かれていた。《同時代人》誌にのったアントノヴィッチの論文《現代のアスモデイ》(1862)はこの作品の芸術的価値および主人公バザロフのタイプの普遍性を否定し、バザロフを若い世代にたいする悪意あるカリカチュアであると述べている。一方ピーサレフは《ロシヤのことば》誌に論文《バザロフ》(1862)を発表し、バザロフをあたらしい時代の代表者として、これへの全面的な賛意を表している。《父と子》の評価をめぐる《同時代人》誌と《ロシヤのことば》誌との意見のちがいは、さまざまな問題についての、両誌のあいだの、ながい論争の出発点となる。

保守的陣営の評価も二つに分かれていた。ある者はこの作品が急進的な青年のタイプを否定的なすがたに描きだしているものと判断し、この作品がロシヤ社会によい影響をあたえるものとして、これを歓迎したが、他の者(たとえばカトコフ)はニヒリストにたいする不当な礼讃のゆえに作者を責めた。

トゥルゲーネフは自作のよびおこした反響が彼の予想しなかったものであることを告白している。《わたしはわたしに好意をもってくれる、親しい人々のなかに、憤激にちかい冷たさを見た。わたしは自分に反対の陣営の人々から祝意をうけ、接吻されんばかりであっ

た。」¹⁾

1863年にはチェルヌイシェフスキーのロマン《何をなすべきか?》が発表され、まもなく発売禁止に処せられたとはいえ、《父と子》におとらぬ、つよい反響をよびおこした。この作品のなかの人物たちは誤解の余地のないすがたで描かれている。革命的青年たちはこれに熱狂し、保守的陣営はこぞってこの作品に憤激した。《新しい人々についての物語から》という副題をもつ、このロマンは、《父と子》とおなじように、60年代の急進的青年のすがたを描いたものであるが、チェルヌイシェフスキーがこの作品に《父と子》にたいする批判の意味をこめ、《父と子》によってまきおこされた論争に解答をあたえようとしていたことは想像にかたくない。

以下ロマン《何をなすべきか?》を念頭におきつつ、バザーロフの思想および性格の特質を規定し、ロシヤ・インテリゲンツィヤの歴史のなかでの、この特質の意味を考察することとしたい。

《同時代人》誌にのったアントノーヴィッチの上述の論文はそれ自体としては偏狭なものであり、作者の意図をも、バザーロフのタイプの本質をも正しく理解していない。

《自己の主人公とその友人たちを彼(トゥルゲーネフ)は心から憎んでいる——とアントノーヴィッチは述べる——彼はあたかもこれらの人物が彼に侮辱と害悪をあたえたかのように、これらの人物にたいして、個人的な憎悪と敵意とをいだいて、侮辱された人間のよう、ことごとくに彼らに復讐しようとしている。》²⁾

しかし当時の急進的な青年たちの多くはアントノーヴィッチの見解を支持したのである。この場合《同時代人》誌とトゥルゲーネフとの関係、とりわけ《父と子》が保守的陣営の雑誌である、カトコフの《ロシヤ報知》にのったという事情が考慮されなければならぬであろう。《同時代人》誌の執筆陣からのトゥルゲーネフの脱退(1860年)は直接にはトゥルゲーネフのロマン《その前夜》を批評した、ドプロリューボフの論文《その日はいつくるか?》の《同時代人》誌掲載をめぐる争いの結果であるが、基本的には革命的民主主義と自由主義との対立の一つの現われである。トゥルゲーネフが、《同時代人》誌と敵対的な立場にある雑誌に、その作品をのせたことは、彼が保守派の陣営に移ったものとして理解され、その作品も民主的陣営にたいする誹謗の書と考えられたのであるが、問題の本質はそのような誤解を生む可能性をバザーロフの形象そのものがもっていたことにある。

トゥルゲーネフ自身は《父と子》の成立の事情についてつぎのように述べている。《主要人物たるバザーロフのもとになったのは、わたしにつよい印象をあたえた、ひとりの若い田舎医師であった(彼は1860年のすこしまえに世を去った)。この注目すべき人物のなかに、その後ニヒリズムと呼ばれるにいたった原則が、成立しかけた、おぼろげな形で具現しているように思われた。……バザーロフのすがたを描くにあたって、わたしはすべての芸術的なものにたいする彼の同情をとりぞいた。わたしは彼に辛辣な、無作法な調子をあたえた。これは若い世代を侮辱しようという、ばかげた希望からでたものではなく、わたしの若い知人のД醫師やそれと同じような人々にたいする観察の結果にほかならない。

1) И.С. Тургенев, По поводу «Отцов и детей» С.С. X, 1956, 347.

2) М.А. Антонович, Избр. ст. 1938, 144.

・・・わたしは彼のすがたをあのように描くほかはなかった。わたしの個人的な好みはここではなんの意味ももっていない。しかしおそらく、もしもわたしが、芸術にたいする理解をのぞけば、バザーロフの、ほとんどすべての確信に同意見であると語ったならば、読者の多くはおどろくであろう》(《父と子》について)¹⁾

バザーロフのタイプの否定的な側面——すくなくとも彼への読者の同情のさまたげとなっているものは、トゥルゲーネフ自身のことばによれば、その《辛辣な、無作法な調子》であろう。トゥルゲーネフはそれが《*Д* 医師やそれと同じような人々にたいする観察の結果》であると語っている。しかしまた、ゲルツェンにあてた手紙(1862年4月24日)のなかで、彼はバザーロフの性格を好意的に描いた部分を、《ロシヤ報知》の主筆カトコフの要求によって、少からず削除したことをつたえている。バザーロフの《辛辣な、無作法な調子》は彼の性格の本質をなすものではないが、彼の《否定の精神》とむすびについている。この《否定の精神》によって、彼はどのような権威のまえにも屈しないし、どのような原理をも、理性の試練の火にかけずには、そのまま自己の信条としてうけいれることをしない。この否定において、彼はつねに辛辣、無作法で、かつ精力的である。

バザーロフはまずしい軍医のむすこであり、祖父が土をたがやしていたことを誇りとしている。彼はすぐれた才能とつよい意志とをもった、誠実な青年である。そして雑階級人としての意識の上に立って、ロシヤ社会における、封建的な、すべてのものをきびしく否定するとともに、この否定の必然性をも確信している。彼はパーヴェル・ペトローヴィッチにつぎのように語る。

《われわれの現代の生活、家庭生活なり、社会生活なりのなかで、完全な、容赦のない否定をよびおこさないような制度を一つでもわたしに示してくださったら、わたしもあなたに同意します。》(10章)

《あなたはわたしの考え方を非難なさるが、わたしの考え方が偶然のものだなどと、だれか言った者がいますか？それがあなたのしきりに擁護しておられる、その同じ国民精神によってよびおこされたものでないなどと言った者がありますか？》(同上)

キルサーノフ家の下男たちやフェーニチカや農奴の子どもたちは、バザーロフが貴族でないことを直感し、彼の飾り気のない態度に好意をもっている。バザーロフがパーヴェル・ペトローヴィッチのような、40年代の自由主義的な貴族にたいして辛辣であり、むしろこれにつよい敵意をいだいているのは、彼がこの紳士を彼の否定する制度の代表者と見なし、これを当面の敵と考えているからである。

ラヴリンは、貴族階級にたいするバザーロフの身分的劣等感を指摘している。²⁾これはバザーロフの《辛辣な、無作法な調子》を生み出す原因の一つであるが、彼の《否定の精神》の基本的要素をなすものではない。彼における否定の精神は自我意識の社会的表現であり、これが彼を封建的なものへの、つよい敵意にみちびくのである。彼はアルカーヂイにつぎのように語る。

《ところで別かれるにあたって、もう一度言っておこう・・・なにも自分をいつわる必要は

1) И.С. Тургенев, С.С. X. 1956, 346, 349.

2) J. Lavrin, An introduction to russian novel, 66.

ないからね。われわれは永久に別かれることになる。君も自分でそれを感じているだろう。君は利口にふるまったよ。君はぼくらの、にがい、じみな、貧乏人の生活には、むいてないんだ。君には大胆さも、怒りもない。ただ若気の勇氣といたづらっ気があるだけだ。われわれの仕事には、そんなものは役に立たない。君たち貴族の連中は高潔なあきらめか、それとも高潔な興奮以上には進めないんだからな。これではどうにもならないさ。たとえば、君たちはけんかしない。それで自分をえらい人間だと思っている。——ところがぼくたちはけんかしたいんだ、そうなれば、ぼくらのほこりが君の目に入るし、ぼくらの泥が君の着物をよごすだろう。君はぼくらの高さまで成長していないんだ。君は自分自身をののしってれば気もちがいいんだが、ぼくらにとっては、それはたいくつなことだ。——ぼくらには相手が必要なんだ。相手をやっつけることが必要なんだ。君はいい青年だが、やっぱり、骨のない、自由主義的な貴族の若旦那なんだ。」(26章)

別かれるにあたってそれよりほかのことばはないのか、というアルカーヂイの問いに、バザーロフはつぎのように答えている。「ほかのことばはもち合わせている。だが言わない。なぜなら、そいつはロマンチズムだから、つまり感傷的になることだから。」(26章) ここには自己の感情にたいする、つよい強制がある。チェルヌイシェフスキーのロマン「何をなすべきか?」のロプーホフやキルサーノフもバザーロフとおなじような生活環境のなかに育った雑階級人であり、貴族階級の特権の承認を拒否し、貴族的人間にたいしては、バザーロフとおなじように辛辣で、無作法であるが、雑階級インテリゲンツィヤとしての思想、感情を確立しているので、これと自己の言動とのあいだの矛盾をもっていない。バザーロフは生活にたいして厳格な要求を提出していながら、みずからその水準に立つためには、しばしば自己を強制しなければならない。彼はロマンチズムにおちいったり、感傷的になったりすることをおそれ、たえず自己を監視している。彼は両親をふかく愛しているにかかわらず、ことさらこれにつめたい態度をとって、自分の愛情をかくし、そのことによって彼らを苦しめている。三年も会わなかった両親と「話すことがなにもない」(21章) というのはすこぶる奇怪な感情であり、バザーロフはここで人間的な、自然の感情を抑制している。彼は封建的な道徳や生活感情を否定するが、いくつかの重要な領域で、これに代わるべき自己の規準を確立していない。

彼は恋愛感情というものを否定しつつも、女性にたいする、つよい愛着をすてることができない。彼はオヂンツォーヴァの美しさについて、粗野なことばを語るにもかかわらず、彼女に話しかけられると、顔を赤くして、戸迷いする(15章)。彼女との会話において、彼は「つねにもまして、すべてのロマンチックなものへの、つめたいさげすみを表明していたが、ひとりきりになると、自分自身のなかのロマンチストに気づいて、腹立たしい気もちになる。」(17章) 彼にはペチョーリンにおけるようなデモニムズはない。けれども彼はオヂンツォーヴァへの愛をこぼまれてまもなく、フェーニチカに接吻する。彼は、この行為によって、自己の内面的自由への試練を課しているかのようにさえ見える。

バザーロフの思想と行為との、これらの矛盾はオヂンツォーヴァとの出会い(14章)のちに起きている。多くの文学史家は、バザーロフがオヂンツォーヴァへの恋愛によって一つの精神的危機に見まわれ、その信念に動揺を来していることを指摘している。あきらかにこのときから彼の思想と行動の矛盾が目立つようになり、彼はしばしばペシミズムにお

ちいる。しかし彼が恋愛によって自己の信念に動揺を来したこと自体が彼の思想のなかの矛盾を意味している。彼は「理想的な、あるいは彼の表現によれば、ロマンチックな意味における愛をたわけごと、ゆるしがたい愚劣事と呼び、騎士的感情などというものは何か不具あるいは病気のようなものと考えていた」(17章)のであるが、ここでも既成道徳の否定のために自己の感情を強制しつつも、これに代わるべき、あたらしい原則をうちたてることができない。これは「何をなすべきか?」の主人公たちとの、いちじるしいちがいである。彼らは個性の解放の要求を婦人の解放の要求とむすびつけ、婦人の人間的尊厳の確立と社会的地位の向上とのための、たえざる努力をつづけている。バザーロフにとって、婦人の解放は既成道徳の否定と破壊ののちに解決される問題である。否定と破壊ばかりではなく、建設もしなければならぬという、ニコライ・ペトローヴィッチの意見にたいして、バザーロフは「それはもうわれわれのすべきことではない……まずはじめに場所をきれいにしておかななくてはならないから」(10章)と答えている。このことばは彼の否定が建設の理念を欠いていることを意味しているように見える。あきらかに彼においては否定の精神が第一義的な重要さをもっている。このことの意味を理解するためには、それが当時のロシアの社会的要求にたいして、またロシア・インテリゲンツィヤの一般的傾向にたいして、どういう関係にあったかを見なければならぬ。

ロシア・インテリゲンツィヤにとって中心的な問題はつねに民衆との関係の問題であった。民衆にたいする負債の意識はすでに18世紀のラヂーシチエフにみとめられる。デカブリストにおいては、それは彼らの思想および行動の原動力の一つとなる。ゲルツェンは「向う岸から」のなかでつぎのように語っている。

「われわれの心理的発達のために必要な閑暇がわれわれに与えられるためには、また思想家が思索にふけり、詩人が空想し、享楽主義者が享楽することのできるような、そしてわれわれの貴族的な個性のはなやかな、気まぐれな、詩的な、ゆたかな発展に役立ちうるような閑暇、活動のゆとりがわれわれに提供されるためには、たれか他の者の勤労が必要なのである。」¹⁾

一方雑階級のインテリゲンツィヤは18世紀のポソシコフ、ロモノーソフの時代から、すこしずつ自己の代表者を送り出している。「悔悟する貴族」とこれとの関係は対立の関係ではなく、混交の関係であった。しかし19世紀の50年代から60年代にかけて雑階級人が社会の各領域に大量に登場することによって、ロシア・インテリゲンツィヤの構成に大きな変化が起きる。ロシア社会の改革の問題をめぐる、貴族インテリゲンツィヤと雑階級インテリゲンツィヤとのあいだの、ある種の対立が、「同時代人」誌とロンドンの「コロコル」誌との論争の形で、表面に現われる。

貴族インテリゲンツィヤにたいする雑階級人の否定的態度は、チェルヌイシェフスキーの論文「ランデヴァーにおけるロシア人」(1858)につづいて、ドブロリュエボフの論文「オプローモフ主義とは何か?」(1859)のなかで、つよく表明される。これらの論文の中心的思想は60年代の緊急な社会的要求の見地からする、余計者のタイプの批判である。一般に19世紀前半のロシア文学における余計者はけっして否定的な形象ではない。彼らがま

1) А.И. Герцен, С.С. VI, 25.

わりの非人間的な世界にたいする抵抗において無力であり、現実にたいして消極的な態度しかとりえなかったことは、当時の歴史的条件のもとでは、やむをえないことである。むしろ彼らの人間性の高さは、まわりの非人間的な世界のむなしさ、みにくさにたいする不満の度合、それへの非妥協性の度合によってきまると言えるであろう。チェルヌイシェフスキーもドブリューポフもこのことを十分に理解していたにちがいない。しかし彼らはこれらの主人公の人間的な志向を尊重しつつも、60年代の社会的要求の立場から、現実にたいするその消極的な態度を批判し、この消極性があたらしい時代の諸条件のなかで、有害なものとなることを指摘したのである。《同時代人》誌の批評家たちにとっては、あたらしい人間、すなわちことばが行為と一致し、国民の幸福のためのたかいははなれては個人の幸福はないと考えるような人間が必要であったので、60年代においてもなお読者をひきつけている余計者のタイプを文学の王座から急速にしりぞけることが必要であった。そしてそのためには若干の誇張もやむをえないと考えられたのである。これはシチェドリンが《アンナ・カレーニナ》を《牝牛的ロマン》と呼んだのと同様である。

しかし《同時代人》誌のこのような方向はゲルツェンをはじめとする40年代人がわからの、つよい抗議をよびおこした。論争は文学の領域で行なわれ、かつ両者のあいだにはすくなくならぬ誤解があったとはいえ、問題はある程度ロシヤ社会の発展の、あたらしい段階についての理解のちがいと、このちがいから生まれる解放運動のプログラムの、いくつかの問題についての意見の対立にある。1859年にチェルヌイシェフスキーは両者間の和解のために、より正確に言えば、ゲルツェンの説得のために、ロンドンにおもむいた。《余計者と不平家》(1860)のなかでゲルツェンはこの会見の内容の一部をつたえている。¹⁾

両者は和解し合うことなく別かれたが、この問題はながいあいだゲルツェンの暗い思考の対象となる。三年後に《父と子》が発表されたとき、ゲルツェンはチェルヌイシェフスキーらの思想および性格の諸特質がバザーロフのなかに一層はっきりとした形で具現しているものと考えた。《ふたたびバザーロフについて》(1868)のなかで、彼はニヒリズムが1848-55年のくらい反動期にロシヤ社会をとらえた思想的疾患の結果であるという結論に達するとともに、ニヒリズムの本質の規定をあたえ、19世紀後半におけるニヒリズム形成の必然性をみとめている。

《ロシヤは七年にわたる、くらい夜にとざされていた。そのあいだにニヒリズムとよばれる思想の形態、思考の様式がロシヤ的知性のなかで形成され、発展し、強化したのである。…ニヒリズム——これは構造なき理論であり、教義なき科学である。これは経験への無条件の信服であり、また観察から生まれ、理性の要求にもとづくものであれば、どのような結果をも、そのままうけいれようとする態度である。ニヒリズムは何かを無にかえようとするものではなく、無が何ものであると思われるのは視覚的偽瞞であるということ、またあらゆる真理は、それが幻想的な表象にいかに対立するものであろうとも、それらの表象よりは健全であり、必然的であるということをあきらかにする。》

《ニヒリズムはそのときから拡大し、一層はっきりとおのれを意識するようになり、部分的には一つの教義となった。そして科学のなかから、多くのものをとりいれ、大きな力と

1) А.И. Герцен, П.С.С. и П. 1919, X, 420-423.

才能とをもつ活動家たちを生み出した。すべてこのことに論義の余地はない。しかしそれはあたらしい原理や原則をもたらすことがなかった。」

「デカブリストは——われわれの偉大な父であり、バザーロフは——われわれの放蕩息子である。われわれがデカブリストからうけついだものは、人間的尊厳のめざめの感情であり、独立への志向、奴隷制度への憎しみ、西ヨーロッパ精神と革命の尊重、ロシヤにおける変革の可能性への確信、その変革に参加しようとする、つよい願い、若さ、未知の力である。すべてこれは変化し、別のものとなったが、その根底は変わることなくのこっている。」¹⁾

《父と子》が発表されてから六年後に書かれたこの文章において、ゲルツェンは事実と和解し、ニヒリストたちの存在の意義をみとめるのであるが、ニヒリズムが《あたらしい原理や原則をもたらすことがなかった》と語るとき、彼はなによりもまず、デカブリストおよび40年代人の上述の原則の不動性を主張しているのである。彼はバザーロフをむしろ60年代人の代表的タイプと見なし、これとチェルヌィシェフスキーとのあいだに、本質的なちがいをみとめないのであるが、同時にデカブリストの基本的遺産の不変性を確信するゆえに、40年代人も60年代人もその基本的志向において変わるべきではないと考える。彼は《若い人々の一部がバザーロフのなかにおのれを見いだしたとしても、われわれはキルサーノフ兄弟のなかにも、全くおのれを見いだすことができない》²⁾と述べている。ゲルツェンは革命家であり、40年代の貴族インテリゲンツィヤの最良の代表者の一人であり、彼の同情は自由主義的貴族のがわにではなく、つねに革命のがわにあった。彼はキルサーノフ兄弟と自分たちとのちがいを指摘しつつも、バザーロフとチェルヌィシェフスキーたちとのあいだに、本質的なちがいをみとめず、《おのれの先行者たちに石を投げる》忘恩的な態度のゆえに、若い世代を非難することによって、問題をふたたび世代的対立にひきもどしている。

チェルヌィシェフスキーが《何をなすべきか?》のなかで革命家ラフメートフを貴族の出身者として描いたことは世代の問題についての彼の和解の意味をもたせたものと考えられるが、ラフメートフは貴族的特質をすべて放棄することによって、60年代の革命家となるのであるから、このことは貴族革命家にたいするチェルヌィシェフスキーの要求の、あたらしい提出を意味するものとも考えることもできる。

しかし60年代のロシヤ社会の諸条件の急速な変化のなかにも、解放運動における貴族インテリゲンツィヤの指導的役割はうしなわれ、彼らはその貴族的特質をもうしなうて、雑階級インテリゲンツィヤと混交してゆく。そして《悔悟する貴族》の意識は雑階級のインテリゲンツィヤをもとらえることになる。彼らは、自己の高い教養にたいして、人民への負債の意識をもつようになる。ラヴロフやミハイロフスキーの熱烈な宣伝は主としてこれらの雑階級人にむけられた。しかしロシヤ・インテリゲンツィヤの歴史をつらぬいているところの、民衆の利益への奉仕の志向は、貴族インテリゲンツィヤによってきずかれ、後代にひきわたされたものであって、このことをよりつよく意識していたのは、上に見たよ

1) А.И. Герцен, П.С.С. и П. XXI, 1923, 237, 238, 234.

2) А.И. Герцен, Еще раз о Базарове, П.С.С. и П. XXI, 1923, 228.

うに、雑階級人のインテリゲンツィヤではなく、ゲルツェンをはじめとする 40 年代人である。ナロードニキ運動も、また 19 世紀後半に、自然科学をもふくめた、文化のさまざまな領域で活動した雑階級人たちの、つよい社会的関心も、この伝統の継承なくしては考えられない。

オフシャニコ=クリコーフスキーはその著《ロシヤ・インテリゲンツィヤの歴史》のなかで、この問題をつぎのように説明している。ロシヤでは理念、進歩、未来、人類一般のために生活し、働くという思想がひろい普及を見たこともなく、インテリゲンツィヤにたいして支配的な力をもったこともない。ロシヤ・インテリゲンツィヤの悲劇は、高い文化の民主化が、うちかちがたい障害に出会ってきたことである。高い文化がそれ自体の価値をもっていて、他のすべてのことについて考えることなしに、それに奉仕しようという考えには、ロシヤのインテリゲンツィヤは同意することができなかつた。彼らは、自分たちの仕事が国民のために役立つものであるという確信をもたないかぎりには、それに没頭することができない。知的、文化的、精神的孤独の状態、余計者、隠遁者の運命と和解しえたのは個々の人々のみであった。余計者たることのつよい意識そのものがこのことを物語っている。インテリゲンツィヤの職業も、それが国民の幸福への奉仕の思想によって鼓舞されて、国民の生活になんらかの形で関係をもつような問題を取りあげる場合にのみ、意義あるものとされた。思想や理念や傾向もこの見地から評価された。あるものは有益なものとして、あるものは国民の利益に役立つものとして、ほめたたえられ、他のものは無益な、あるいは有害なものとして拒否された。これはロシヤの思想、良心、労作にたいするほとんど絶体的な判決の規準であった。¹⁾

このことはゲルツェンとチェルヌィシェフスキーのつぎのことばによっても、確認することができる。

「思想、知識、信念、教義はわが国ではけっして抽象的理論の状態にとどまることはない。アカデミヤの僧院のなかにとじこもったり、さまざまな毒物とならんで、学者の戸棚のなかにかくれたりすることはない。反対にそれらは、まだ成熟しないうちから、あまりにも性急に実際的な生活のなかで、つき進もうとする。理論のなかの生活というものは実際的な領域とは一致しないものだということを知っていて、この点で妥協しているところのドイツ人たちのあいまいな二重性というものは、ロシヤ的な精神にとっては、まったくいとうべきものである。」(ゲルツェン)²⁾

「自己の活動によって学問を發展させつつある先駆的な人々は国民全体の生活が科学の成果によってつらぬかれるようになることを望んでいる。」(チェルヌィシェフスキー)³⁾

このような伝統のなかで、バザーロフの思想および性格は一つの不協和音のような印象をあたえる。彼はパーヴェル・ペトローヴィッチに自己の体験をつぎのように語る。

「——だが、その後わたしたちはさとりました。わが社会の欠陥についてしゃべり立て、ただいたずらにしゃべっているだけなら、たやすいことです。凡俗主義と空論にみちびくだけです。いわゆる先駆的な人たちや暴露者たち、わが国の賢人たちはなんの役にも立た

1) Д.Н. Овсяннико-Куликовский, С.С. т. VIII, 89-90.
2) А.И. Герцен, Прологомена, П.С.С. и П. XX, 1923, 87.
3) Н.Г. Чернышевский, Избр. фил. с. 1938, 202.

ない。われわれはくだらないことに没頭して芸術とか、無意識的創造とか、議会制度とか、弁護人制度とか、そんなわけのわからないことについて議論しているが、一方では日々のパンの問題がさし迫っている。ひどい迷信が国民をおしつけている。株式会社はみんな、ただ正直な人間が足りないばかりに破産している。政府のあくせくしている農奴の解放にたつて国民のためになるかどうか、知れたものではありません。わが国の百姓ときたら居酒屋でへべれけになるためには、喜んで身の皮をはいでいるんですからね。

——なるほど——とパーヴェル・ペトローヴィッチはさえぎった——あなた方はそれをすっかり確信したので、自分では何にもまじめに手を出すまいと決心したんですな？

——それでわれわれは何にも手を出すまいと決心したのです。》(10章)

バザーロフはロシア社会の個々の欠陥の批判が本質的な改善をもたらすものではないと考えている。この点で彼は《同時代人》誌の方向と共通点をもっている。チェルヌィシェフスキーらはゲルツェンの《コロコル》誌による、専制政治と農奴制との批判が政府の改良政策に役立つにすぎず、かえって革命の実現をさまたげるものと考えていた。しかしバザーロフが同時に、《何にも手を出すまいと決心した》と語るのは彼が革命よりも個性の解放と啓蒙の必要を第一義的に考えていることを意味する。さらに彼は自分の利益の所在をも知らない無知、無気力な民衆を非難し、彼らが軽蔑に値するから軽蔑するのだと語る(10章)ばかりではなく、民衆への憎悪を表明する。

《・・・だがぼくはこうしたフィリップとか、シードルとかいう水飲百姓が憎くなった。彼らのためにぼくはさんざん骨を折らなければならないのだが、彼らはぼくにありがとうとさえも言わないだろうからね。それにありがとうなんて言ってもらったって、何になるんだ。彼らは小ぎれいな家に住むようになるだろうが、そのころには、ぼくの体からは山ごぼうが生えているだろうよ——それっきりさ。》(21章)

このような意識はそれ自体としては革命家のものではない。しかし民衆にたいする、バザーロフのこの軽蔑と憎悪のおくには、彼らの運命へのふかい関心、彼らへの愛情がある。民衆の無智、貧困、無気力の状態を是認し、この状態の変化をおそれる者は民衆を愛するものではない。民衆を愛する者は民衆のかかる状態に不満と怒りをおぼえ、自己の生活の改善への意志と努力を欠く民衆の無智と無気力をはげしく責めるであろう。ゲルツェンも民衆への自己の愛情、彼らの運命への深い関心のなかにある、彼らへの憎しみと怒りについて語っている。《たしかにわれわれの愛情のなかには憎しみがある——と彼は書いている——われわれは怒りにもえている。われわれは、自分たちのおかれている状態のゆえに政府を非難するとおなじ程度に、国民をも非難する。われわれは最もきびしい真実を語ることをおそれない。しかしわれわれは愛するがゆえにこれをするのである。われわれは歴史の最後の一ページがわれわれの同時代の現実であることを知っているがゆえに、現在から過去にのがれることをしない。われわれは国民の悲しみの叫びのまえに耳をふさがない。われわれは奴隷制度がどれほどまでに国民を墮落させているかを、心をいためつつ、みとめる勇気をもっている。これらの悲しい結論をかくすこと、これは愛情ではなく、虚栄である。》¹⁾

1) А.И. Герцен, О развитии революционных идей в России, С.С. VII, 1956, 247.

バザーロフはここですくなくとも、ロシヤ・インテリゲンツィヤの伝統的志向である民衆の救済への義務感から解放されていない。彼における自然科学の研究も、芸術の否定も、ここにその基礎をもっている。彼の否定はけっして目的のないものではない。

「しっかりした科学者はどんな詩人よりも二十倍も有益です」(6章)、「ラファエルなんて半コペイカの銅貨にも価値しませんよ」(10章)、「現在なによりも有益なのは否定です——だからわれわれは否定するんです」(同上) バザーロフのこれらのことばは、すべて国民の利益の見地から語られている。「宣伝はわれわれの習慣にはないことです」(10章)という彼のことは、彼が60年代の革命家でもなく、伝道者でもないということを示しているが、彼が社会の問題に無関心であるということの意味するものではない。パーヴェル・ペトローヴィッチとの議論(10章)のなかでも、オヂンツォーヴァとの会話(16章)のなかでも彼は社会問題への関心を示し、社会制度の変革を必要と考えている。

バザーロフにおける自然科学の重視は彼の思いつきや好みによるものではなく、社会的な必然性をもったものである。当時ロシヤばかりではなく、ヨーロッパにおいても、哲学の潮流は形而上学および観念論哲学から自然科学的な唯物論に移っている。ロシヤでも、すでに50年代に自然科学への、つよい関心が現われており、学生たちは大学の物理数学科や医学部に集中している。自然科学の研究と唯物論哲学の普及とが社会に本質的な利益をもたらし、かつ進歩と解放の運動に大きな役割を演ずることのできる重要な事業と考えられた。オフシャニコ=クリコフスキーは、自然科学への当時の学生たちの熱中についてつぎのようにつたえている。「内外のすぐれた科学者たちの名前が大きな尊敬を拍し、その政治的見解などは問題とされることがなかった。もろもろの権威の否定も科学的業績や、リービヒ、ベヤ、ダーウィンなどの名前を尊敬するさまげとはならなかった。これらの科学者の名前やそれと結びついた科学思想は青年たちのあいだに、〈人民〉〈自由〉〈平等〉〈友愛〉〈正義〉などということばにも劣らない熱狂をまきおこし、先駆的な青年たちは、科学と唯物論哲学のなかに没入したような観があった。」¹⁾

バザーロフもまたこのような青年たちの一人である。「何をなすべきか?」の主人公ローホフやキルサーノフが医学生であったことも偶然ではない。しかしバザーロフはこの場合に自然科学への自分の熱中を感覚によって説明している。

「原理一般なんてものはないんだ——君はいままでそれがわからなかったのか?——とバザーロフはアルカーヂイに言った——感覚があるだけだ。すべては感覚にかかっているんだ。」(21章)

「ぼくは否定の方向をとっているが、これは感覚のためなんだ。否定するのがぼくには気持ちがいいのだ。ぼくの頭がそういう風にできている——それだけのことさ。なぜぼくには化学が気に入っているのか。なぜ君はりんごがすきなのか?やはり感覚のためだ。それはみんな同じことさ。人間はそれよりおくへは、は行って行けないんだ。」(同上)

原理への服従を拒否し、自分の行動を律するものは自分の感覚のみだと語るバザーロフのことばには、彼の自我意識の特質が現われているかのようである。しかし、第10章で、すなわち彼がオヂンツォーヴァへの恋とその破局とによって精神的な危機におそわれるよ

1) Д.Н. Овсяннико-Куликовский, История русской интеллигенции, С.С. т. VIII, 68.

りもまえの時期に、彼はパーヴェル・ペトローヴィッチにむかって、「現在なによりも有益なのは否定です——だからわれわれは否定するんです」と語っている。ここでは、否定するのが気持ちがいいから否定するのだとは言っていない。この場合、否定の有益性を規定するものは、感覚ではなく、意識であり、思考である。彼が医学を学んでいるのは、それが彼の気にいっているからではなく、彼が医学の有益性を意識しているからである。しかも彼がそれを社会にとって、国民にとって有益だと考えていることは言うまでもない。プストヴォイトは、バザーロフを感覚論者、一元論者とするヴォロフスキーの見解¹⁾に同意しつつ、バザーロフの感覚論とチェルヌィシェフスキーの感覚論とのちがい、とりわけバザーロフにおける感覚と意識との混同を指摘している。すなわちチェルヌィシェフスキーはその《哲学における人間学的原理》において、感覚が客観的現実の反映であり、意識されるものであることを指摘し、感覚から思考にいたる過程を説明している。感覚は認識のひくい段階であり、感覚、表象、概念は認識のそれぞれことなる段階である。直接的感覚から概念に移るにあたって、人間は自己の感覚を意識するが、感覚を意識と同一視することは正しくない。バザーロフはこれを混同することによってチェルヌィシェフスキーの哲学から後退する。当時のロシアの青年たちのあいだでは、唯物論がひろく支持されていたとはいえ、この唯物論は最も単純、明解な、かつ最も非哲学的な形で理解されていた。プストヴォイトはここでつぎのような、ある程度矛盾し合う三つの結論をひき出している。一) トゥルゲーネフは、唯物論におけるデュヒネル的な素朴性が当時のロシアの支配的な傾向であったという事実を、バザーロフのなかに定着させた。二) トゥルゲーネフはバザーロフの哲学的見解をロマンの前半においてはチェルヌィシェフスキー的唯物論に近いものとして描き、ロマンの後半においてバザーロフに精神的な危機を体験させたのちには、チェルヌィシェフスキーからデュヒネル的な素朴唯物論へと後退させている。三) トゥルゲーネフ自身が当時一般的であった、哲学におけるデュヒネル的傾向の影響を受けて、これとチェルヌィシェフスキーの唯物論とのちがいをよく理解していなかった。²⁾しかしここで、プストヴォイトの考察からひき出すことのできるもう一つの結論はバザーロフにおける自然科学の研究がロシア社会にとってのその有益性の意識にもとづくということである。

バザーロフにおける芸術否定の思想は、ロシア・インテリゲンツィヤの伝統的志向のなかで、とりわけつよい不協和音の印象をあたえる。なぜならそれ以前には、ロシア社会に、芸術の積極的な否定の思想が芽ばえたことはなかったばかりではなく、反対に、ながいあいだ芸術、とりわけ文学は国民の利益への奉仕のための、重要な、ほとんど唯一の領域と考えられてきたからである。バザーロフにおける芸術否定の問題は二つの面をもっている。第一にバザーロフは、彼自身のことばによれば、芸術を理解しない。第二に彼は芸術を有害無益なものと考えている。しかしこの二つはかならずしもつねにむすびつくものではない。バザーロフが芸術を有害無益なものと考えて、これを積極的に否定するのは、彼が芸術を理解する能力をもたないからではなく、当時のロシアの社会的諸条件のもとで、芸術

1) В.В. Воровский, Базаров и Санин, Литературно-критические статьи, 1956, 229.

2) П.Г. Пустовойт, К проблеме положительного героя в русской литературе 60-х годов XIX века, Вестник М.У. 4-1956, 103-105.

が社会の第一義的に重要な諸問題の解決をさまたげている、と考えるからである。60年代の急進的な社会思想のながれのなかで、社会的利益への芸術の奉仕の思想が強調され、40年代の特徴である唯美主義的傾向にたいする批判的な態度がつよめられてゆくが、一方保守的陣営の文学者たちは、当時の社会的諸勢力のはげしい対立のなかで、純粹芸術の理論をかかげて社会問題への芸術の関与に反対した。このような条件のもとで、雑階級インテリゲンツィヤのあいだには、芸術がロシア社会の多くの重要な問題から人々の注意をそらす役割をしているものと考えて、芸術そのものを否定する思想が生まれる。この思想はのちにピーサレフの諸論文のなかで体系化されるのであるが、その芸術形象としての表現は、バザーロフのなかに、はじめて見いだされる。かくてバザーロフによる芸術の否定は、彼の個人的な好みによるものではなく、社会的な必然性をもっている。しかしおなじ社会的諸条件のもとで、チェルヌィシェフスキーやドブリューポフは、国民の利益への芸術の奉仕の思想をつよくおしすすめはするが、けっして芸術の原則的な否定の思想に到達することはなかった。それゆえチェルヌィシェフスキーが《何をなすべきか?》の主人公たちを芸術の愛好者として描いたことは十分な理由のあることである。

かくてバザーロフにおける自然科学の重視も、芸術の否定も、一般に個性の自由の要求も、否定の精神も社会的なものへの彼の無関心を意味するものではなく、ロシア・インテリゲンツィヤの上述の伝統的志向に対立するものでもない。それゆえピーサレフが論文《バザーロフ》のなかでバザーロフにおける個性の自由の主張を一面的に強調しつつ、つぎのように語る時、彼はバザーロフを正しく理解していないのである。

《彼(バザーロフ)の行動をつかさどるものは個人的な慾望あるいは個人的な打算のみである。自分の上にも、自分の中にも、自分のそとにも、彼はいかなる統制者も、いかなる道徳的法則も、いかなる原理もみとめない。彼のまえには、いかなる目的もなく、その思考のなかには、どんな高い意図もない。》¹⁾

もっとも、バザーロフについてのピーサレフの第二の論文《リアリスト》(1864)のなかでは、バザーロフはいわゆる《リアリスト》の典型とされている。最近ゴルプコフはその著《トゥルゲーネフの技法》のなかで、バザーロフの多くの発言にはピーサレフおよび《ロシアのことば》誌によって代表される革命的民主主義の潮流が反映しているとして、バザーロフにおける社会的活動のプランの不明確性はトゥルゲーネフがそのロマンの材料をあつめていた、1859-60年の時期におけるピーサレフ型の啓蒙主義者のもとに、はっきりとした社会的-政治的プログラムが欠けていたことによって説明されると述べている。²⁾ この考察はバザーロフの形象とピーサレフの思想との相互関係の点で年代的な不明確さをもっている。当時の急進的民主主義陣営のなかで《同時代人》誌を中心にした集団のほかには、はっきりした政治的プログラムをもったものがなかったことは事実である。《ロシアのことば》誌は1861年にピーサレフが参加するまでは政治問題へのつよい関心を示したこともなく、とりわけて民主主義的な雑誌でさえもなかった。ゴルプコフの言う1859-60年の時期には、ピーサレフは19-20才で、まだペテルブルク大学の学生であり、1859年

1) Д.И. Писарев, Сочинения, 1955, т. II, 11.

2) В.В. Голубков, Художественное мастерство И.С. Тургенева, 1955, 154.

に《オブローモフ》《貴族の巢》《三つの死》についての彼の最初の三つの小論文を婦人雑誌に発表したばかりである。そしてあくる年の春には、強度の神経衰弱にかかって、数カ月のあいだ入院している。またトゥルゲーネフがピーサレフと知り合いになったのは1867年になってからである。それゆえトゥルゲーネフがバザーロフの形象を創造するにあたって、ピーサレフの思想および性格から、なんらかの影響をうけたと考えることは困難であり、ただバザーロフの思想および性格はピーサレフの場合と同じ時代的条件のもとに成立したと言いうるのみである。初期のピーサレフの思想のなかには、バザーロフ的傾向、あるいはリアリズムのいくつかの芽ばえが見られるとしても、ピーサレフのリアリズムの思想は1864年以後の諸論文のなかで、はじめて体系化されるのであるから、バザーロフの形象を媒介として形成されていると言わなければならない。ここではむしろ両者の思想の共通性の社会的必然性とその思想の普遍性が確認されるべきであろう。

ピーサレフの思想とバザーロフの思想とを同一視することはできないとしても、ピーサレフにおける民衆の革命的能力への、また土地所有の共同体原則への不信、ロシアの急速な工業化への、したがってまた《進歩的資本家》の役割への期待、ロシア社会の改革の手段としての自然科学の重視と芸術の否定、社会主義への無関心、個性の自由の第一義的な追求と、すべての封建的なものの絶体的否定などはすでにバザーロフのもとに見いだされるものであり、チェルヌィシェフスキーやドブロリューボフにも、《何をなすべきか?》の主人公たちにも、さらにゲルツェン、オガリョフにも見られないものである。とりわけ共同体へのバザーロフの不信(10章)は当時の急進的な社会思想のながれのなかで、注目すべきことである。土地所有の共同体原則は50年代のはじめからゲルツェンによって熱心に擁護され、1858年にはチェルヌィシェフスキーの論文《共同体的土地所有にたいする哲学的偏見の批判》が出ている。将来の社会主義の実現の基礎としての共同体原則への期待は、当時の急進的インテリゲンツィヤの多数派の傾向であった。

かくてバザーロフとピーサレフの思想の共通性、バザーロフと《何をなすべきか?》の主人公たちとの政治的プログラムのちがいが、バザーロフの形象の評価の問題にはじまり、そののちロシア社会のさまざまな問題にわたって展開された、《ロシアのことば》誌と《同時代人》誌との論争は60年代においてロシアの改革を志向する、雑階級のインテリゲンツィヤの二つのタイプ、解放運動の二つのプログラムがあったことを示している。バザーロフは《何をなすべきか?》の主人公たちとともに、60年代ばかりではなく、そののちのロシアの青年たちにも、つよい影響をあたえた。レーピンはその回想記のなかで述べている。《文学のなかから二人の主人公が——模倣すべき手本として——学生たちのあいだで支配的であった。すなわちラフメートフとバザーロフである。》¹⁾ このことはバザーロフのタイプがラフメートフのタイプの出現ののちにも、またラフメートフのタイプとの大きなちがいにもかかわらず、自己の存在の意義をもっていたことを語っている。

バザーロフの形象に見られる、いくつかの矛盾は、60年代初期のバザーロフ的タイプのインテリゲンツィヤのもつ矛盾であるが、またロシアの現実にたいする作者トゥルゲーネフの理解のなかの矛盾の反映でもある。トゥルゲーネフは貴族インテリゲンツィヤにつよ

1) И.Е. Репин, Далекое и близкое, 1953, 198.

い愛着をもちつつも、貴族階級の歴史的運命を見とおしていたし、ロシア社会にバザーロフのタイプの青年たちが現われたこと自体が貴族階級の退場の歴史的不可避性、彼自身のことばによれば、「貴族階級にたいする民主主義の勝利」を立証するものであること、そして実際に雑階級インテリゲンツィヤがロシア社会の改革にとって必要な勤労のエネルギーを、貴族インテリゲンツィヤよりも、はるかに多くもっていることを理解していた。そして《父と子》のなかで、60年代の雑階級人のあたらしい社会的タイプの、いくつかの本質的な特質をとらえることができた。「生活の真実、現実を正しく、力強く再現することは、この真実が自分自身の同情と一致しない場合でさえも、文学者にとって大きな喜びである」¹⁾と彼は語っている。しかし彼は、たとえば、バザーロフをして、オヂンツォーヴァへの恋愛のなかに、大きな精神的危機を体験させている。このことののち、バザーロフは自己の思想への確信をうしなって、急速に懐疑とペシミズムに移行し、みずから否定していたところのロマンチズムのとりことなる。そしてバザーロフの形象はいくつかの本質的な矛盾を示すことになる。またバザーロフのなかでは、おもに否定と破壊の面が強調されている。トゥルゲーネフがバザーロフをこのように描いたことはトゥルゲーネフ自身の《同情》、ロシア社会の現実にたいする彼の理解と無関係ではない。このことをゲルツェンが、トゥルゲーネフにあてた手紙(1862年4月21日付)のなかで、指摘している。「君はバザーロフにひどく腹を立て、腹立ちのあまり、彼を戯画化して、ばかげたことをしゃべらせ、ピストルで殺そうとしたあげく、チブスで殺してしまった。だがバザーロフはなおかつ、ひげに香水をつけた空虚な人間や、不決断な父親や柔和なアルカーディを圧倒している。」

トゥルゲーネフはスルチェフスキーにあてた手紙(1862年4月14日付)のなかで、「彼(バザーロフ)がニヒリストと名づけられているなら、これを革命家と読むことが必要である」と書いている。このことは作者がバザーロフを革命家として描こうとしたか、あるいは描いたものと考えていたことを意味する。しかしすでに見たようにバザーロフは革命をロシア社会の当面の課題とは考えていない。すなわち現実に描かれたバザーロフは革命家ではない。60年代の革命家たちの理想は農民革命による社会主義共和国の実現であり、社会主義の基礎となるものは農村共同体である。バザーロフは農民の革命的能力にも、社会主義にも、共同体にも、なんの期待をも示していない。60年代の革命家たちの活動が成功したとしても、彼らが実現しえたものは、資本主義的市民社会であって、社会主義社会ではないであろう。トゥルゲーネフはおそらくこのことを予見していたであろう。しかし彼がその見解をバザーロフのなかに具現したとするなら、バザーロフは、その政治的見解において、60年代のロシアの革命家とはちがったものになる。60年代における《同時代人》誌の革命的立場とその政治的プログラムはうたがいの余地のないものであり、それゆえに、トゥルゲーネフは1860年に同誌の執筆陣から脱退したのである。

トゥルゲーネフが《父と子》を書いていた、1860年8月から1861年8月にいたる時期にロシアはいわゆる革命的情勢のなかにあった。1861年2月19日の農奴解放令の布告をさかいとして農民暴動が急激に増大し、多くの革命的檄文が発行され、1861年の夏か

1) И.С. Тургенев, По поводу «Отцов и детей», С.С. т. X. 1956, 349.

ら秋にかけて革命団体《ヴェリコルース》の活動が見られる。ロシヤは革命前夜の様相を示していた。《父と子》のなかの事件は 1859 年の夏に設定されているが、トゥルゲーネフが 1860-61 年のロシヤ社会の重大な危機感を作品のなかに反映させず、バザーロフを、革命への予感をも、関心をもたない人間として描いた理由として考えられることの一つは、革命への期待をもたず、革命によらずにロシヤ社会を改革しようとする一部のインテリゲンツィヤの志向、すなわちのちにある程度ピーサレフおよび《ロシヤのことば》誌によって代表される方向を彼がバザーロフの形象のなかに具現したということである。すなわち作者トゥルゲーネフは、彼自身の言明にもかかわらず、バザーロフを革命家として、すくなくとも 60 年代に現実存在した、ロシヤの革命家のタイプとして、描く意図をもっていなかったということが考えられる。トゥルゲーネフが実際にバザーロフを革命家として描く意図をもっていたら、彼はバザーロフを革命家としての生活および思想のなかに描かなければならない。彼がこのことをしなかったのは、芸術家としての彼の能力とも、彼が 60 年代の革命家および革命運動について、チェルヌィシェフスキーよりも、少い材料しかもってなかったという事情とも、また検閲を考慮しなければならなかったという事情とも、全くかわりのないものであろう。検閲の事情についていうならば、チェルヌィシェフスキーの方が、はるかに困難な条件のもとに、そのロマンを書かなければならなかったのである。この場合スルチェフスキーあての上記の手紙にしても、〈《父と子》について〉にしても《父と子》にたいする、革命的青年のがわからの、つよい非難にこたえて書かれたもので、ある程度弁明的な性格をもった文章であることも考慮されなければならぬであろう。

しかし、なおかつトゥルゲーネフがバザーロフを革命家として描いたものと考えていたとするなら、彼がここで《革命家》なる語を特殊な意味に用いているものと考えなければならぬ。トゥルゲーネフはバザーロフが、個性の自由のためのたたかいにおいて、敗北することを予感し、彼を破滅に運命づけられた、悲劇的な人物と考えている。上記のスルチェフスキーあての手紙のなかで彼はこの悲劇性を強調する。《わたしの空想したのは陰気な、粗野な、巨大な人物、地上に半分だけすがたを現わした、力づよい、怒りにもえた、誠実な、しかしそれが未来への戸口にたっているゆえに破滅に運命づけられた人物のすがたであった。》チェルヌィシェフスキーのロマンの主人公たちはみずから革命家であるか、あるいは革命運動とのつながりを持ち、社会的利益への奉仕にたいする、強制された義務の意識をもたない。彼らには理想と行動、義務と熱情、個人的なものとの社会的なものとの分裂がない。彼らにあっては、個性の自由の要求はチェルヌィシェフスキーのいわゆる理性的エゴイズムの理論にまで高められている。彼らは自分たちの仲間がたえず増大してゆくことと、そのことの歴史的必然性とを確信している。バザーロフはパーヴェル・ペトローヴィッチにむかって《われわれの数はあなたの考えているほど少くはない》と語っている（10 章）にもかかわらず、ロマンの全編を通じて、つねに孤独である。彼はアルカーヂイをも、シートニコフをも、クークシナをも信じない。作者がバザーロフの、これらの崇拜者たちを、バザーロフとはいちじるしくちがったものとして描き出し、ことにシートニコフとクークシナとをみじめな喜劇的人物としていることは、バザーロフの孤独性を一層つよめ、バザーロフのタイプの普遍性を弱める結果となっている。しかしエピローグ

(28章)ではシートニコフが〈ペテルブルクをうろつきまわって、彼の確言するところによれば、バザーロフの《事業》をつづけている〉ことが述べてある。シートニコフやクークシナがバザーロフの《事業》について表面的な理解しかもっていないことは、ロマンのなかで、いく度も強調されているが、この《事業》が存在し、シートニコフによってつづけられていることを語ることによって、トゥルゲーネフはバザーロフの形象が普遍性のない例外的な現象でもなく、完全に孤独なものでもなかったことを示している。しかしバザーロフ自身は死の直前にふかい懐疑にとらわれている。「…ぼくはロシアに必要な人間なんだ…いや、必要ではないようだ…だが一体、だれに必要なのか?」と彼は語る。チェルヌィシェフスキーの主人公たちが封建的なものを否定するばかりでなく、未来の理想を積極的に示しているのにたいして、バザーロフはついにそのような理想を示すことなしにおわる。「何をなすべきか?」の結末は未来へのあかるい展望をもっている。ロマンの最後の節につけられた《舞台装置の転換》という題は革命の成就を意味する。《父と子》におけるバザーロフの死とエピローグとのあたえる、くらい印象は自分の主人公たちにいつもくらい運命を約束するトゥルゲーネフの懐疑主義の反映でもある。もっともこのような、くらい運命はトゥルゲーネフの主人公ばかりではなく、《智ゆえの悲しみ》、《エヴゲーニ・オネーギン》、《現代の英雄》、《誰の罪か?》をはじめとする19世紀前半のロシア文学の代表的な作品の主人公たちに共通のものである。しかしこれらの余計者の批判者であり、封建的現実の力づよい否定者として登場したバザーロフの死はモチーフとしての十分の必然性をもたない。トゥルゲーネフはバザーロフの死をその悲劇的なすがたに最後の仕上げをするために必要であったと考え、それを《罪ふかい反逆のたましい永遠の和解》(エピローグ)と述べている。

ルナチャルスキーはその論文『60年代の文学』のなかでこの問題を別の角度から見ている。「トゥルゲーネフは彼(バザーロフ)をかなり早く死なせてしまった。——とルナチャルスキーは述べる——トゥルゲーネフにとっては、バザーロフがどんな人間になるかを物語るよりも、死なせてしまう方が楽だったのである。彼はバザーロフをさらに発展させて、ブルジョア的な、自己満足的な大学者のタイプにつくり上げるか、それとも彼を革命家にするほかはなかった。それ以外の道はなかった。そこで彼はバザーロフを若いうちに思いきって殺してしまったのである。」¹⁾

ゲルツェンはバザーロフのタイプの永続性を否定している。「オネーギンやペチョーリンは通りすぎた、——とゲルツェンは書いている——ルーヂンやベリトフは通りすぎつつある。バザーロフは通りすぎるであろう。…むしろ非常にすみやかに。これは長くもちこたえるためには、あまりにわざとらしい、思い上がったタイプである。」²⁾ゲルツェンにはある程度、雑階級人にたいする世代的偏見が見られる。彼は問題を主として40年代人と60年代人との関係の見地から見て、若い世代を《歴史的忘恩》のゆえに責める。そしてバザーロフのなかにこのタイプの代表者を見ている。ピョートル・クロポトキンはバザーロフを40年代人とではなく、ラフメートフと比較することによって、バザーロフのタ

1) А.В. Луначарский, Русская литература, 1947, 86.

2) А.И. Герцен, Еще раз о Базарове, П.С.С. и П. т. XXI, 1923, 229.

イプの過渡的性格を指摘する。《ロシヤの青年はトゥルゲーネフの主人公(バザーロフ)のもっぱら消極的な態度には満足することができなかつた——とクロボトキンは書いている——個性の自由を主張し、あらゆる偽善を否定するニヒリズムは、平等に自由な、しかし偉大な運動のために生きる男女のより高いタイプへの第一歩にすぎなかつた。彼らは、芸術的には、はるかに劣っている小説〈何をなすべきか?〉に描かれているニヒリストたちのなかに、彼ら自身のよりよい肖像を見たのである。》¹⁾ バザーロフを過渡的タイプとするこの見解は、そののちヴォロフスキー、ルナチャルスキーをへて、今日のソ連の文学史家(たとえばプストヴォイト)のもとに見いだされる。

《バザーロフのなかに彼(トゥルゲーネフ)は破壊と否定の特徴のみをみつめ、そのことによってバザーロフに一面的な、ほとんど戯画的な性格をあたえた。バザーロフのタイプは——ある程度修正されて——ピーサレフとそのグループによって支持された。しかし現実にはバザーロフ型の否定者がロシヤ社会の部分的、過渡的現象にすぎなかつたことを示した。これは雑階級人の幼虫であつた。》(ヴォロフスキー)

《ピーサレフには、彼の愛するバザーロフ的タイプが確固とした社会的現象であり、当分のあいだはバザーロフの形象を完成し、描き足すだけで十分であると思われた。実際にはバザーロフは雑階級人インテリゲンツィヤの発展における初期の過渡的段階にすぎなかつた。純粹のバザーロフ的傾向の時期がしばらくつづいたのちに、雑階級インテリゲンツィヤは進化せざるをえなかつた。この進化の出発点となつたものは、バザーロフの二つの(原理ということばをさけるなら)〈感覚〉、すなわち〈一般の利益〉と〈人々の世話をやく〉必要とであつた。この二つのモーメントは、ロシヤの現実に適用されると、非常にすみやかに雑階級人をして、蛙を放棄して、政治にたずさわることを余儀なくさせたのである。》(同上)²⁾

《バザーロフが生活をこの偉大な事業のためにささげていないということが、彼をして、チェルヌィシエフスキー、ドブロリューポフ、さらにはピーサレフ自身よりは、むしろ後期のピーサレフ主義者たちとのあいだに、より多くの類似性をもつところの過渡的タイプとしている。》(ルナチャルスキー)³⁾

《クロボトキンと、それにつづいてヴォロフスキーがバザーロフを過渡的タイプと見なしていることは完全に正しい。》(プストヴォイト)⁴⁾

バザーロフが矛盾の多い、未完成な、それゆえにまた何かへの過渡的なタイプであることは明らかである。しかしバザーロフのまへには、《ブルジョアの大学者》と革命家との道のほかに、第三の道、たとえば国民の運命へのつよい関心をもち、自分の仕事を国民の利益と結びつけようとする、誠実な科学者の道もまた可能であつたと思われる。19世紀後半のロシヤ社会は現実にそのような、多くの、すぐれた科学者を生み出している。これはルナチャルスキーの言う《後期のピーサレフ主義者》とは別のものである。バザーロフは革命家になるよりは、かかる科学者になる可能性と資質とをより多くもつていた。すでに

1) P. Kropotkin, *Memoirs of a revolutionist*, 1899, 301.

2) В.В. Воровский, *Литературно-критические статьи*, 1956, 210, 235.

3) А.В. Луначарский, *Русская литература*, 1947, 87.

4) П.Г. Пустовойт, *Вестник М.У.* 4, 1956, 109.

見たように、このタイプは、それ自身のなかにさまざまな矛盾をもっていたとしても、基本的な諸特質において革命家ラフメートフとは、いちじるしいちがいを示しているし、ロシア社会の改革について、ラフメートフ的プログラムとは別のプログラムをもっている。70年代から80年代にいたるロシア社会の唯一の解放運動であるナロードニキ運動は単一の運動ではなく、そのなかには共同体にも、農民の革命的能力にも、社会主義の急速な実現にも期待をいだくことなく、なによりもまずロシア社会の急速な近代化を志向する人々もいた。トゥルゲーネフは、ある意味では、同時代のたれよりもするどく、ロシア社会の発展の方向を見とおしていたとすることができる。ロマン《処女地》(1877)において70年代の革命家を描いたときにも、彼はソローミンの形象を創造することを忘れなかった。70年代には、バザーロフもナロードニキ運動に無関係であることはできなかったであろう。しかし彼は、その場合にも、革命家にはならなかったであろうと思われる。農奴解放後のロシア社会の発展はロシア・インテリゲンツィヤの上述の伝統が、科学者としての活動領域でも、あたらしい発展をとげるための諸条件を準備していたからである。